

Title	柳宗元評伝(呉文治著, 中華書局刊)
Sub Title	The critical biography of Liu Tsung-yuan (柳宗元) by Wu-Wen-zhi (呉文治)
Author	太田, 次男(Ota, Tsugio)
Publisher	三田史学会
Publication year	1963
Jtitle	史学 Vol.36, No.4 (1963. 12) ,p.103(523)- 109(529)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19631200-0103

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

批評と紹介

柳宗元評伝

(吳文治 著
中華書局 刊)

太 田 次 男

侯外廬主編による『中国思想通史』の唐宋時代(巻四上・一九五九年初版)をみると、狩野直喜博士の『中国哲学史』などには全くみることのできなかつた多くの人名——呂才、柳宗元、李觀——に接するし、また、これまで朱子及びその一派に相当の頁数を費していたのに対し、総体的に、重点の置き方にも著しい相違がみられる。これまで、主として経学の思想的展開を中心にして、思想史乃至哲学史が成立していたことを思いつつ、現代中国に於ける学問的立場や方法を考えれば、無論こういう変質は当然のことであつて、別に異とするに足りない。

普通唐朝の古文の大家として、韓柳と並称される二氏のうち、従来とても、韓愈については、宋学との関連に於て、李翱とともに取上げられてきたが、柳宗元に対しては、文学的研究を除いては、政治や思想的側面が問題にされることは寧ろ極めて稀であり、しかも、政治的活動が取上げられるときは、批判的乃至は否定的に扱われるに過ぎなかつた。

侯外廬は柳宗元を劉禹錫とともに、その唯物主義、無神論及

び戦闘的性格に於てとらえ、そのかつて属した王叔文一派の政治活動を、政治革新として高く評価しているが、これは勿論、すでに陳寅恪や韓国磐が、伝統的見解を批判しつつ、史的研究に於ても論究した通りである。黄雲眉は柳宗元について「高度に政治闘争性をもつ傑出した文学者」(『韓愈柳宗元文学評伝』引言)と述べているが、現代中国に於て、この立場からする柳宗元研究はいよいよ活潑のようで、ごく最近のものでは、侯外廬・李学勤により「柳宗元《天对》在中國唯物主義史上的科学地位」

(『歴史研究』一九六三年・第二期)などという思想的にかなり注目すべき論文も書かれるに至つている。いま、ここに取上げようとする『柳宗元評伝』(後記、一九六〇年、一九六二年八月第一版・北京)の著者吳文治——中国人民大学語文学系に属す——は、柳宗元について「その文学作品には、当時の社会の暗黒を批判し、時政を議論する政論的散文があり、統治階級が人民をそこなうのを諷刺し、社会の病態をあばく寓言的小品があり、自己の政治的抱負を述べ、正しい人を迫害するの抗議する文学的辞賦があり、水声山色を描き、山水遊記を述べ、不遇を愁い、朋を思う抒情詩篇がある。」「その散文中に表現されている現実主義精神は白居易の詩歌中に表現されているこの種の精神と比肩する美しさをもつている。」(前記)と概括し、また後記に於て、この著述の目的を、従来の誤つた柳宗元への評価を正し、「其の民主的性格の精華を摂取して、以てわれわれ社会主義新文化の発

展の参考にしたい」と云つてゐるのも、共通の態度と立場からする発言であるのは無論のことである。ただ、ここでこの著を取上げようとするのは、これまでも特殊問題に関する論文は多くあつたが、全生涯を大観したものは余り見当らなかつた。これはそれ程大部なものではないが、ともかく評伝と名づけられているので、唐代の政治、社会を背景にして、柳宗元の全貌が如何に把握されているかに若干の興味をそそられ、また、具体的人間を通して、時代精神を理解しようとしたのである。

この本は十五章に分けられ、それに年譜が附されているが、はじめの五章では、当時の政治、社会情勢から、柳氏の家系、友人、その思想形成の基礎、王叔文との関係など、永州流謫以前の情況が重点的に述べられている。

安史ノ乱以後、六朝以来の門閥制度が崩れ、中小地主階級出身の青年知識分子―科挙出身者―が旧貴族的統治に不満を感じ、革新とまではゆかなくとも、比較的進歩的な思想をいだき、次第にそれは時代の一般的傾向となつた。しかし、社会的変動が激しくはあつても、勿論、その存立の基礎までが危うくされることはなく、従つて、その支えとしての儒教思想が本質的に批判されることはない。その意味で、柳宗元などが政治活動の中で主張する、生民を中心とする政治思想も、特に新しい思想ではなく、既に孟子が「民を貴と為す」という、古くから儒教が内包する思想を一步前進させたに過ぎないし、また「終

南山祠堂碑」(宗元廿四歳の作)には、まだ、統治階級を利することになる「低級な神祕迷信思想」(廿四頁)が明かに包含されていることや、やはり初期に於ける政治家と思想家との内部に於ける矛盾、動揺をも著者は見逃さず、これを「封建庸俗の一面(二三頁)と指摘するのである。

しかし、中央政界に於ける気鋭の政治家としての種々の経験や、特に人民の貧苦の生活に直面し、或いは友人間の思想的交流によつて、次第に活動の思想的基礎が自覚的に形成され、禍福や社会的治乱に対し、かつて肯定していた神的存在の影響力を批判し、これを否定するとともに、世襲制によらず、有能な人材による革新政治を要望する。元来柳宗元と韓愈はほぼ同じ階層に出自をもち、共通の政治意識をもつべき筈であるが、この為政者側の宗教的要因の利用に対する不信が、やがて一方を根本的には現政権への肯定的態度へ、他方を批判者に変える。その意味で、この点は確かに今後の両者の政治生活の一つの分岐点となるのである。

以上、柳宗元の長安に於ける生活の中で特に注目しなければならぬのは、師、友人間の思想的相互影響関係であり、ここで形成されたものが、王叔文の政治集団参加への思想的基礎にもなるが、著者の記述はこの点で、幾分追究が浅く、陸質、呂温、韓泰や、特に政治活動の中心人物である王叔文との内的交流が、もつと具体的に、明瞭な形で示されて然るべきである

う。王叔文一派の事件は、柳宗元の長安時代のいわばクライマックスをなすものであり、この面に於ける深い内的考察がなければ、青年時代の柳宗元の姿は浮び上つてこないのではないか。総じて、概括的説明と外部的分析が目立ち、これらの人間関係によつて生ずる脈動のとらえ方には、やや不満が残るのである。評伝であるからには、ここに中心が置かれもつと柳宗元自身に焦点がしぼられて然るべきではなからうか。

この事件に対する従来の伝統的評価は、殆んど例外なく王叔文・柳宗元側を非難してきたが、現代中国の研究はこれを唐代統治階級内部の矛盾の現われとし、具体的には、政権に参加している大地主階級と中小地主階級——王叔文はその代表であるとする——との対立抗争とみなし、王叔文一派の運動を政治改革として、これを正当化した。この評価は誤ではなからう。その際、従来の評価を生ぜしめた張本人の一人に韓愈が挙げられ、著者によつて断罪に処せられているが、当時、中小地主出身者で、大地主階級出身の最高統治者層に近づく者は元稹などのように、外にも決して少なくはなかつた。韓愈なども、いわば両方に足場もつてその時代を生きてきた存在といえるので、その上流に近接する態度のみを徒に批判するよりも、中小地主層出身の政権参加者にも種々の生き方があることを、韓柳両者を含め、それらを対比しつつ、広い立場から敘述すれば、著者の強調する柳宗元の政治的立場も一層明瞭となり、その説得力もさ

らに強まるのではないか。しかも、韓文の随所に指摘できる、柳宗元を充分尊重し、これを正当に評価しようとする一面や、同じような社会批判のあることを考えれば、表面的相違を超えて、両者の同質性を実感せざるをえないのである。

王叔文一派の政治改革は失敗し、これに連坐した者はことごとく、死刑あるいは流謫の身となつた。柳宗元にとつても、十年に亘る永州時代がはじまるが、本書ではこれを第七章から十章にわたつて扱っている。政治の局外に立つて、柳宗元は文学、思想に著しい深化をみせるので、本書に於ても、ここが最も興味深いのは当然といえる。

先ず第七章力を文学の創作に致す、であるが、貶官後、永州の地に於て活潑な創作活動が始まり、優れた作品が次々と書かれてゆく有様が述べられている。

柳宗元は「苛政は虎よりも猛し」（礼記・檀弓）を引用して、流謫の地永州に於てはじめて、痛切にこの言葉の正しさを知らされたといっている（捕蛇者説）。著者はこれを説明して「彼はもと封建統治階級中に属する人物であり、労働人民に接近したことがなく、深く現実を認識していなかつたので、孔子の説くこの話を理解できなかつた。しかし貶官後、久しく荒僻の地永州にあつて、親しく民間の疾苦をみる機会をえてからは、終にこれを信ずるようになった」（六八頁）といっているが、長安、永州両時代の文章の相違を比較すれば、こういう体験的違いがも

たらずものが如何に大きいか、理解することができる。

さらに著者は、謫居生活に於ける、やむことのない憤怒、悲哀、抑鬱や、社会の暗黒面、人民の痛苦への凝視によつて、強烈な現実主義精神に貫かれた文学作品が次々と生まれ、具体的には、当時の腐敗した統治者への批判的言辞や人民に対する深い同情ともなつたことを指摘し、筆鋒の犀利、辛辣な数々の諷刺風な寓言的短篇としては、「憎王孫文」「種樹郭橐駝伝」「熊説」「捕蛇者説」「宋清伝」などが列挙されて、解説される。そして、ここに表わされた柳宗元は、貶官生活の単なる激憤や困苦を乗超えて「堅強な意志」(八二頁)を貫く闘争的姿勢に於てとらえられている。勿論著者とて、自己の苦悶を酒杯にまぎらしている柳宗元の一面を決して見逃しているわけではないが、これは極めて消極的な扱い方に過ぎない。

いわば政治犯として、十年の永きに亘る流謫生活にも拘らず、仏・道などの超世俗的思想に身を委ねずに、最後まで現世にしつかりとふみ止まつて、政治的人間としての姿勢を崩さなかつたこと自体、白居易や韓愈の比較的短い流謫の内的生活に較べても、たしかに驚嘆に価することであるが、それだけにその内面生活に立入つてみれば、計り知れない程の深淵がたゞえられていたに相違あるまい。柳宗元の永州に於ける十年間の歴史を内面から辿つてみれば、一見恐ろしい程の空白の時代もあり、それがやがては、多産で活動的な時期にも連なるなど、内

的振幅の激しさが示されている。

剛毅を以て自他俱にゆるす韓愈ですら、わずか半年の流謫生活に既に弱音を吐いているが、同情者の進言によつて、十年後によくやく帰還した長安で、柳宗元を待つ憲宗をはじめとする重臣たちの王叔文一派への不信の念は、時の経過を以てしても、些かも薄らいではないのである。帰還早々にして、再び柳州へ驅逐されるのも、決して偶然ではない。所詮、柳宗元は再び中央に復帰できる身ではなかつた。そして恐らくは、この冷厳な現実を最も適確に見通していたのは、外ならぬ柳宗元自身であつたであらう。第十章で触れられる山水記の、あの清澄無比な対自然觀照も、計り知られない内部にある鬱屈したものの照射とみなければ、到底理解することはできないのである。

こう考えてくると、永州に於ける柳宗元の一見戦闘的姿勢を、単純に外面から肯定的にとらえることには、さらに一考の余地があるといわねばならない。それは悲嘆に堪え、これに徹しようとする決意に支えられて後によくやくえられた姿勢であり、しかも尚、時として不安定な一面が随時みえるのを見逃すわけにはゆかないのである。現政権に対する、いわば公的な批判的、戦闘的態度と、純粹に個を追求する静的なものとは、矛盾するどころか、寧ろこれと深い関連に於てこそとらえらるべきであらう。

これと関連するが、第十章山水遊記と閑適の追求は、所謂永

州八記を中心に柳宗元の対自然観が述べられているが、ここでは比較的内部的考察がゆき届いているといえる。著者は、山水の記述の中に、自己の苦悶をやる柳宗元の姿をみ、また、山水の美と人間の醜悪さを対照させつつ、自己の憤懣を表現する手法を認め、一見閑適風にみえる表現のうちに柳宗元の苦悶を見出し、或いは永州に棄てられているかに見える小丘を絞する言葉に、柳宗元自身の感慨を読みとるのである。そして著者は、柳宗元の自然に対する態度として「彼は全注意力を集中して対象（客観景物）の本質に深く入ることができ、対象の変化の中から、対象と人の生活との関係の中から、対象と周囲の景物との関係の中から、対象の総体的特徴をつかみ、以て異つた情況下の具体的特徴に及び、簡練に概括し、また生動具体に対象内の生命氣息を表現する」（二六一頁）「これらの言葉は、すべて極めて簡練であつてしかも豊富な内容を持ち、作者の深刻な観察を経て体得せられた独特なものを写し出している」（二六二頁）と述べているが、この、全身を対象に没入させ、最も凝縮した簡潔な言葉で対象を描きうるところに、永州に於ける柳宗元の緊張した生命をみることができるのである。しかも、著者も指摘するように、それは決して隠者流の、現世を否定したような作風ではなく、その描かれた山水は一種独自の生命に溢れている点に、流謫生活に於ける思想の深まりを読みとることができ。著者はまた、韓愈に山水記のないことを述べているが、こ

れは意味深い指摘といえよう。単なる遊覧記ではなく、内から山水を描くことは、その土地に密着し、そこに生き且つ死のうとする者によらなくてはならないことを示すようである。

著者はこの山水記を一種の閑適としてとらえているが、前にふれた戦闘的態度とどう結びつけるのであろうか。山水記の、永州生活全体に於て占める位置を、もう少し明かにすることが必要ではなからうか。

次に、前にもどつて第八章唯物主義無神論思想の論者、であるが、「非国語」「天説」「天対」「封建論」「断刑論」などにみられる合理的思想が、政治革新の理論的根拠として説明されている。天人感応論に於ける天の神秘化が、人民を欺騙する一種の愚民政策に過ぎないことを、既に長安時代の政務に従事していた頃から実感した柳宗元は、「措説」その他にみられるように、具体的問題毎にこれを批判してきたが、新興中小地主階級の豪門貴族や宦官旧官僚に対する政治革新への理論的根拠として、明確な意識を以てこれを深化徹底せしめたのが、永州時代であつた。その点で柳宗元のこの種の諸著に対する著者の説明は、比較的要を得ているが、どちらかといえば、出来上つた思想そのものの解説に終始して、これらの思想が、柳宗元の内部に次第に熟してゆくという過程に於て、柳宗元自身の体験を通してみられることが少ない。かつての政治活動を共にした仲間各地に分散され、都から遠く永州に追放された柳宗元にとつ

て、再度都に帰つて新しい活動をする機会は殆んど皆無である。一般に流謫された場合に、多くの人は一応自己反省し、転向的言辞を弄し、やがて都への帰還がかなえられるが、柳宗元を取りまく政治環境はもつと厳しかつた。勿論、政治犯として、その政治行動には種々の拘束があつた。とすれば、不変の信念として内部に持続される政治改革に対する激しい意欲は、ただ内向、深化するより外はなかつたし、孤独と深い幽愁の中にあつて、いまは、左右を顧慮し、妥協する必要もなかつた。こういう環境下に、徐々に固まつてゆく態度の過程的考察をふまえて、諸著作の内容分析が行われれば、評伝として一層ふさわしいものになるのではなからうか。

第十一章は古文運動の歴史的展望の中で柳宗元をみている。著者は「古文運動の勝利は中唐時代、新興地主階級の知識分子が文学上、政治上の長期闘争の結果であり、政治運動の産物であり、歴史的必然の結果である」(二九五頁)と述べているが、古文を広汎な立場に立つてみることはよいとしても、ここで直ちに古文運動の勝利という表現が、唐代を現時点として考えるとき、果して妥当であるか、勝利という言葉に多少幅のあることを考慮に入れても、史の実情に照して、やや疑問がもたれる。

また、古文運動の代表として韓・柳二人を比較し、実際の貢獻の上で両者を同等にみなそうとするのはよいが、思想方面の成就について、柳宗元が韓愈より遙かに勝るといつているの

も、これ亦、遽に賛意を表し兼ねる。両者の思想家としての質からすれば、柳宗元の方がより獨創性をもち、或いは優れているといえるかも知れない。しかし、広い思想の歴史の流れの中に両者を置いて比較する場合に、性急な判断は容易に下しうるものではない。思想的傾向から、著者が柳宗元により好意をもつことは自由であるが、それを議論の上にならば微妙に反映させることは戒心を要する。

この点に関して、次の第十二章韓愈との交わりと論戦には、両者を比較しつつ、思想上の柳宗元の立場が論じられていて、興味がもたれる。

著者は、両者の間柄には一定の距離がある、(二〇四頁)といつているが、確かに政治的立場や思想の相違から、歴史編纂、仏教論、天人感応論などをはじめとして、多くの点で思想的にも対立してきたし、同じ古文といつても、詩文に関する両者の意見すら、必ずしも源流や系譜を同じくはしていない。

しかし、両者の対儒教観はどうであろうか。著者は「韓愈は儒家の道統を強調し、自分を道統の継承者たらしめようとした。これに対して柳宗元は儒家の思想の一部に賛成したが、批判的に其の他諸家のものを撰取しようとした」(二二三頁)「彼は(儒教を)根本から徹底的に否定することはできず、只折衷的調和的立場から、三教を同旨とした」(二二一頁)といつているが、柳宗元の所説のどこをみても、儒教そのものへの批判乃至

否定は全くみられない。著者は柳宗元に、三教調和を指摘しているが、これは三教が同等に扱われていることを意味するのではなく、寧ろ儒教の補助強化としてはじめて、仏・老が肯定されたとみるべきであり、天人感應論の否定など、儒教の一部を否認するかにみえようが、これとてその論理の筋を辿つてゆけば、儒教本来の合理性に立脚するものであつて、儒教体系のわくを出る全く新しい考え方ではないのである。勿論、そういう制約を認めた上で、柳宗元の思想の独自性と、その時代に於ける劃期的意義とはどれ程高く評価されてもよいが、思想上に於ける柳宗元の思想の遠近法には、さらに慎重を要するように思われる。韓、柳二人の論争も次元を異にした、いわば世界觀的相違に基づくものではなく、政治的立場の相違から、その過程に違いがあつても、共に儒教の強化を劃した点で一致することは、何人もこれを否定することはできないのである。

第十三章から十五章までは、四十七歳で死ぬまでの、柳州刺史時代の三年間を扱っている。閑職の永州司馬から刺史ともなれば、一応地方政治の主宰者として、人民をもとにするというその政治理想が、幾分具体化するのをみることもできるが、やはり晩年の柳宗元の悲哀は最早どうすることもできない。著者の筆もそれを素直に写し出している。

以上、各章を一通りみてきたが、既に述べてきた幾多の問題点を含みながらも、柳宗元の全貌に接し、その方法や視点のと

り方では、種々の刺戟を与えられた。従来、文学史上の柳宗元の評価は一応ほゞ確定しているように思われるが、特に永州に於ける、復離を極める内面生活を、この期に於ける多くの文学作品との関連の上で如何に処理するか、更に一層の考究が必要であろうし、合理主義的、唯物論的主張にしても、従来の儒教的思想体系との対比に於て、中国思想史の流れの中でこれをどう位置づけるかは、尚、今後の課題のように思われるのである。

(一九六三・十・四)